

【資料名】「写真帖」(南米移住者合同結婚式)

(香川県立文書館蔵文書 319)

【年代】(昭和39年)

【作成】(香川県)



資料1



資料2

【解説】

まず、南米移住について解説する。明治期以降、日本は国策として積極的に海外移住を推進してきた。これは、農村の労働力の余剰や貧困問題を改善するための出稼ぎ労働者が急増したことによるものである。

明治前半(1868～1899年ごろ)にハワイ・グアムに移住を始めたのを皮切りに、明治後半(1900～1908年ごろ)に北アメリカ移住、明治末から大正・昭和初期(1908～1935年ごろ)には南米移住、昭和10年代(1932～1945年ごろ)になると満州への移住が盛んになった。

しかし、植民地であった満州を除いて、移住先では農業などの過酷な労働や差別・排斥を受けるなど、想定以上の苦勞が多くあった。昭和14年(1939年)に国際情勢を鑑みてブラジル等への海外移住は中断され、再開は講和条約締結を待つこととなった。

終戦後、引揚者復員者により人口は急増し、また、農家の二・三男は推定3万人いるとされた。

特に香川県は元々耕地面積が狭いため、十分な土地があてがえないことが問題となっていた。そこに講和条約の締結があったため、海外移住の気運が一気に高まり、昭和27年(1952年)、戦後初めて17家族54人のブラジル移住を行った。その後パラグアイ、アルゼンチン、ボリビアへと次々と移住が行われた。



資料4



資料3

単身青年の移住希望者が増えると、県は結婚斡旋事業にも乗り出した。結婚適齢期の者は、単身で移住するより結婚して若夫婦で移住するほうが良いとの判断からであった。

「香川県南米移住史（発行香川県・平成16年）」によると、昭和39年（1964年）2月29日、記念すべき5組の夫婦が誕生した。合同結婚式は高松市石清尾八幡宮にて行われ、媒酌人は金子知事夫妻が務めた（資料1・2）。

新郎は皆、昭和35年（1960年）に農業労務者として米国に3年間派遣された第2回生で、任期を終え昭和38年（1963年）7月に帰国した23人のうちの5人だった。

新婦は、1人は新郎の出身町村を中心に探し内定した方々で、残りは、神奈川県の花嫁移住希望者の訓練講習を行ってある財団法人海外移住婦人ホームの修了生の中から推薦された方だった。

結婚式から1ヵ月後の3月30日、5組の夫婦は、親族等から盛大に見送られ、新天地南米へと出港した（資料3・4）。

現在でも、香川県と各国の移住者の交流は盛んに行われており、記念式典訪問や香川県人会役員招聘など友好親善を深めている。